

教育学部1年前期における学修に関する一考察 II

－教職入門Iを通して－

A Study on Learning in the First Semester of First-Year Students in the Faculty of Education II
－ Through the Introduction to the Teaching Profession I －

関 口 睦*

SEKIGUCHI Mutsumi

【キーワード】 教職に対する意識 教員養成 教職支援 学生の不安感 授業改善

1. はじめに

教員採用選考試験の競争率（採用倍率）は国の調査によると平成12年度の13.3倍をピークに減少傾向が続き令和3年度実施の教員採用選考試験全体の採用倍率は3.7倍となった。⁽¹⁾ また、近年は「教師不足」が問題となっており、国の実態調査では令和3年度始業日時点の全国小・中学校の「教師不足」の人数（不足率）は合計2,086人（0.35%）、5月1日時点では1,701人（0.28%）にも及んだ。⁽²⁾ いわゆる義務標準法に基づき算定されている小・中学校の教職員定数に対する充足率は、101.8%ではあるが、少人数指導や生徒指導等に対応する加配定数分の教員が配置できず、教育の充実・質の向上のための取組が十分なされなかった学校が存在したことになる。また、小学校では、学級担任がいないという状況を避けるため、本来担任ではない職務の教師が学級担任を代替しているケースが474件あった。その内訳は、少人数指導などの指導体制充実のために配置予定であった教師が143件、主幹教諭・指導教諭・教務主任が代替したケースが205件、生徒指導の充実のために配置された教師が37件、初任者研修に係る拠点校指導教員などが36件、管理職が代替したケースも53件あった。中学校では当該教科の教師がいないことにより当該教科の必要な授業を行えていない例は、5月1日の時点で中学校16校、高等学校5校あり、5月中に概ね解消、遅くとも7月時点では全て解消している。しかしながら、その間、各学校では教育課程を変更するなどの措置を講じながら対応するなど、学校運営上に大きな支障があったことは想像に難くない。さらに、今年度の6月に国が都道府県及び指定都市教育委員会に行ったアンケート調査でも、令和5年度始業日時点の教師不足の状況は令和4年度当初と比較すると改善したと回答したのは小学校では12、中学校で11、同程度が小学校26、中学校33、悪化が小学校30、中学校24と深刻な状況が続いている。⁽³⁾

このように教師不足が教育における大きな課題となっている中、埼玉大学教育学部（以下、本学部）に対する教員養成への期待は大きい。しかしながら、教育実習や大学での学修の在り方がその後の教職に対する意識に大きく影響しており、教職に対する意識が向上していない現状が附属教育実践総合センター（以下、実践センター）の過去3回にわたる調査研究で明らかになっている。⁽⁴⁾ 例えば、平成28年度入学生の4年間の教職に対する意識の変化は、教職に対する意識に迷いがある、若しくはもてていないと捉えられる学生が1年次25.1%、2年次35.7%、3年次45.5%となり4年次でもほとんど減ることがないとされている。そこで、昨年度は1年次後期から2年次に至るまでのわずか半年の間で一体どのような変化が学生の中で起きているのか、その変化の兆候を1年次前期の教職入門Iの指導の中に見出すことができないかと考え、担当クラス47名を対象に学生の気持ちの変化を丁寧に分析し、教職を目指して入学してきた学生の中で大学入学直後の学修において学生にどのような気持ちの変化が起きているのか、課題解決に向けてより丁寧なアプローチの仕方はないのかなどについて調査研究を行った。⁽⁵⁾ この調査を通して、本学部では入学時から自分の進路に対して教職以外の道もパラレルに志向している学生が一定数いること、将来教師としてどんなことをやってみたいのかが不明確なまま入学してきていること、世の中から求められる教師像に合わせて自らの教師像を考える傾向にあり、自分自身のあるべき教師像を描くことができず、自分の持ち味（強み）を教職に生かすことができないと思われる学生がいることなどが明らかになった。また、教職の現状について具体的に知ることによって不安を増長させてしまう傾向があり、そのことが今後の大学での学習の在り方に大きな影響を与え、教職への志向の減退につながってしまうのではないかとということが懸念された。学生の学校現場に対するリアリティ

* 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

ショックは予想外に大きく、それは教育実習だけで起きているのではなく、それ以前の大学の授業においてすでに起きていると言える。

2. 研究の目的と方法

2-1 目的

上記の調査結果を受け、今年度は学生の不安や心配などに配慮しながら教職入門Ⅰの授業を進めていくことでそれが学生の学修や教職への志向にどのような影響を及ぼすかについて詳しく調査研究をし、指導の改善につなげていく必要があると考えた。本研究では、昨年度の課題点、とりわけ学生の学校現場に対するリアリティショックは予想外に大きく、大学の授業においてすでに起きている点に留意して授業を進めることで、学生の学修や教職への志向にどのような影響を及ぼすかを詳しく調査研究し、今後のカリキュラムや望ましい教職支援の在り方について提案することを目的とする。

2-2 方法

本研究では、本学部の1年次前期に設定されている必修科目である教職入門Ⅰの受講者を対象に毎時間の授業で使用したOPPシート⁽⁶⁾及び授業の初回と最終回に実施した質問紙調査(教職入門Ⅰ意識調査アンケート)⁽⁷⁾の分析を行うこととする。調査は、関口が担当した教職入門Ⅰの受講者47人(中学校コース・英語・数学・音楽・技術・家庭分野、養護教諭養成課程)を対象に行う。OPPシートの授業感想欄については、教職や大学での学修に対して肯定的に捉える傾向が見られる記述と否定的に捉える傾向が見られる記述に分類し、分析をする。なお、本シートの授業での扱いは学生の本音を可能な限り引き出すことを目的としているため、GPなどの評価に使用しないことを学生には事前に伝えている。また、質問紙調査の調査項目は、1年授業開始時及び終了時における自らの教職に対する意識を振り返って数値で記入するもので、「教師になりたい気持ち」について「とてもなりたい」を10、「全くなりたくない」を0とし、10から0の11段階で回答するものとした。さらに、「そのように回答した理由」「本授業を履修して教職への意識が変化したかを振り返ってどのような変化があったか」、「教職に対して今、疑問に思っていることや不安を感じていること」について、いずれも100字程度で記述されたものを分析する。

上記の調査結果と昨年度の調査結果を比較分析し以下の点について明らかにし、本学部の学生へのより良い指導や授業の在り方などについて具体的な考察をする。

- ①授業改善により学生の不安感や学修に対する意欲について昨年度と比較してどのような変化があったか
- ②教員になりたい気持ちは昨年度と比べてどのように変わったか。
- ③授業改善がどのような意識をもった学生に効果があったか。
- ④授業改善が教職に対する意識にどのように影響を与

えたか

- ⑤教職に関する疑問や不安にはどのようなものがあり、授業改善によりどのように変容していったか

最後に本学部の学生が教職志向を高く保ち、卒業後の進路につなげていくために、学生の指導はどうあるべきか、また、どのように対応することが望ましいか、具体策を提言としてまとめる。

3. 結果と考察

3-1 今年度の授業について

分析の結果と考察を述べる前に、今年度の教職入門Ⅰの改善点について触れたい。

本授業は実践センターの実務家教員が1年次の学生を6つのグループに分けて各自が担当している。表1は昨年度の主な内容で第4回から第9回までは6名の教員がオムニバス方式で各グループを1時間ずつ担当している。昨年度と変更した点は第2回の「大学と出会う」では、「学びの意義」について問いを投げかけ学生に考えさせた点と第14回「求められる教師像」を「理想の教師像」に変更した点である。これは、他から求められる教師像について考えるのではなく、まずは「自分の軸」をもつことができるようすることをねらいとしたためである。理想の教師像である「自分の軸」をもつことはリアリティショックに自ら立ち向かい、不安を払拭していく原動力となると考えらる。⁽⁸⁾

また、各授業では学校の現状や教員のあるべき姿などについて各教員が話をしている。このことと関連して昨年度の研究から以下のような考察が得られている。⁽⁹⁾

- ①学生は各自自治体の採用試験受験案内や様々な媒体を通して多くのことが教員に求められていると過度に感じてしまっている。そのため、自分の理想の教師像を見失いがちになる傾向にある。
 - ②同様に我々大学の教員も無意識にあるいは結果として似たような文脈で授業を進めてしまっていることはないか振り返る必要がある。
 - ③学生に厳しい現実、あるいは、あるべき姿や求められる姿を伝えていくことは当然大切なことだが、現実やあるべき姿・求められる姿が様々な形で学生に伝わっていく中で、不安だけが彼らの中で増大していけば、自分の“理想とする教師像”を描き、教師としての“軸”を確かなものにしていく思考はなかなか働かなくなる。
 - ④従って、授業を通して教員が語ったことを学生がメタ認知を働かせてどのように受け取っているのかを把握し自ら授業を振り返り、時には学生に対して直接フォローすることが彼らの不安感を払拭し、教職及び学修への意欲につながるようになる。
- そこで、今年度は上記の内容について年度当初に実践センター実務家教員で共有し、カリキュラム改善を行い学生の不安感に配慮をしながら授業を進めることを確認した上で、必要に応じて学生へのフィードバックをOPPシートや授業を通じて行った。

【表1 教職入門Ⅰの主な内容】R4

第1回	オリエンテーション
第2回	大学と出会う
第3回	教職の意義と教員の役割
第4回	価値のランキングから学ぶ
第5回	学級経営（学びの場）
第6回	教職をめぐる課題
第7回	子ども理解
第8回	インクルーシブ教育入門
第9回	家庭（保護者）との連携
第10回	これまでの授業の振り返り（問いづくり）
第11回	安全確保と救急救命
第12回	現職教員から学ぶ
第13回	教職を目指す生活設計
第14回	求められる教師像
第15回	総括

3-2 学生の不安感の程度や学習に対する意欲の変容について

次頁の図1-1は令和5年度、図1-2は昨年度のOPPシートの分析結果である。OPPシートは第2回から第15回までのものを毎時間学生が記述し提出したものを、次回の授業までにコメントなどを記述し返却している。OPPシートの感想欄の記述内容から「肯定的記述」と「否定的記述」を抽出し、全体の中でどの程度の学生がそれぞれの記述をしたかをパーセントで表したものである。1回の授業で「肯定的記述」と「否定的記述」の両方が確認された場合は、両者をカウントしている。

「肯定的記述」は、教職に対して前向きな姿勢や意欲が見られるもの、これまでもっていた不安が解消されたと思われるもの、教職の魅力が感じられた記述があるものなど、教職への志向や学修に対して肯定的な傾向が見られる記述である。例としては、「自分は教員になりたいと思ったときなれるか不安でしたが、『不安に思う人ほど教員になってほしい。すぐできる人などいないから少しずつ教員になっていけばよい』と先生がおっしゃってくれたおかげで少し肩の力が抜けました（第2回 大学と出会う）」「出会った子どもの数だけ学びがあるということに納得した。生徒一人ひとりを見るタイミングは学校生活の中でたくさんある。その貴重な瞬間を逃さないようにして、生徒と向き合いたい（第7回 子ども理解）」「先生になった時に誰にでも優しい学校を作っていきたい（第8回 インクルーシブ教育入門）」「モニターペアレントに対してかなりびくびくしていたが、今自分に必要なのは大多数の保護者との関係を考えることだと思った。大きな不安に目を奪われて大切なことが見えなくなっていたと気づけた（第9回 家庭との

連携）」などである。

一方、「否定的記述」は、教師として求められていることについて負担や不安、困難を感じているもの、教職に就くことに対する戸惑いを感じさせる内容、学校現場への否定的な批判など教職への志向や学修に対して否定的な傾向が見られる記述である。

図1-1と図1-2を比較してみると明らかに今年度は「肯定的記述」が増え、「否定的記述」が減った。各授業における「否定的記述」は学級経営がテーマの「学級（学びの場）」が42.6%から10.6%、「教職をめぐる課題」が53.2%から25.5%、「インクルーシブ教育入門」が27.7%から8.5%、「家庭（保護者）との連携」が36.2%から8.5%に減り、「肯定的記述」が増えた。また、「否定的記述」に変化がなかったものの「肯定的記述」が伸びたものとして「子ども理解」（12.8%から66.0%）が挙げられる。これらは、授業において各教員が学生の教職に対する不安感に配慮して授業を進め、授業後提出されたOPPシートにも否定的記述に対する適切なコメントを返し、誤解や気になる記述があった場合には次回の授業で配布する振り返りプリントに掲載するなどのきめ細かな指導が効を奏したと考えられる。プリントの掲載例としては例えば、第5回の学級経営では「学級経営ができるかどうか不安です。何かまとめてコツが書いてある本などが欲しくなります」「グループのメンバーと話しながら、『先生は〇〇のように教室を運営していたのだな』と新たな発見をすることができました。自分の思っている以上に細かいことまで意識しなければならぬので少し不安になりました」というコメントに対しては「これまで知らなかったことを初めて知ったので誰でも不安になると思います。知ることをきっかけにして自分なりに探究をしていけばよいのではないのでしょうか。これも少しずつ教師になっていくためのものだと思って考えていきましょう。」と返し、学級経営に関する参考図書を掲載した。

また、学生の何気ない感想に対しても、コメントを短くつけて返すことで、学修への意欲を喚起した。例えば、「思ったよりも学校の課題が多くあり、その解決までは大変だと思ったが、教師としてのやりがいを感じながら頑張りたい（第6回 教職をめぐる課題）」という感想に対しては「多くの課題＝やりがいと捉え直そうと考えているところが素敵ですね」と返している。

このような取組を継続的に実施した結果、後半に入っても、昨年と比較し「否定的記述」が減少し、「肯定的記述」が増加したと考えられる。特に「学校安全と救急救命」については子どもの命を守るという非常に重い内容であったにも関わらず前向きに捉える生徒が増えている（「肯定的記述」17.0%→55.3%）。

以上のことから、否定的な捉えを共有し、不安に思っているのは自分一人ではないことに学生自身に気づかせ適切な対応をその都度とっていくと同時に、「肯定的記述」やどちらともとれないような記述に対しても学修への喚起を促すことを主眼にコメントを返していくこ

とで学生の教職に対する不安感を軽減し、学修に対する意欲を高めることが可能であることが明らかになった。

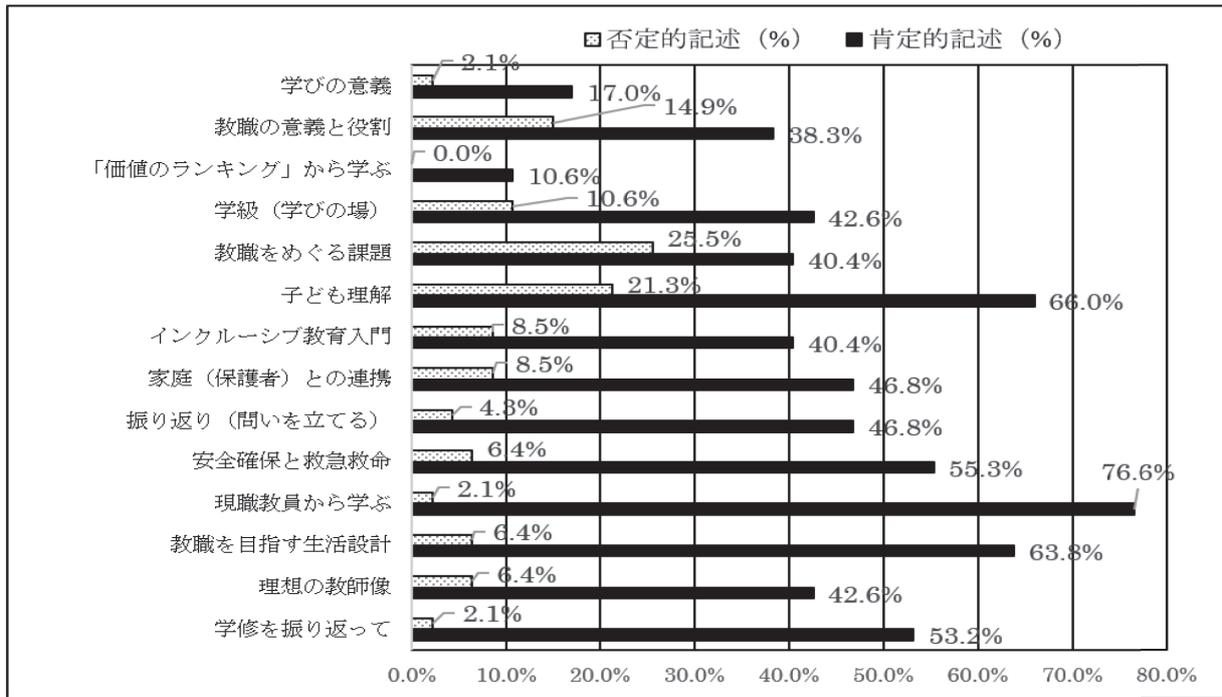
次に本年度実施した授業改善が教職への志向などどの程度影響を与えたかについて見ていく。

3-3 学生の教職への志向の変化について

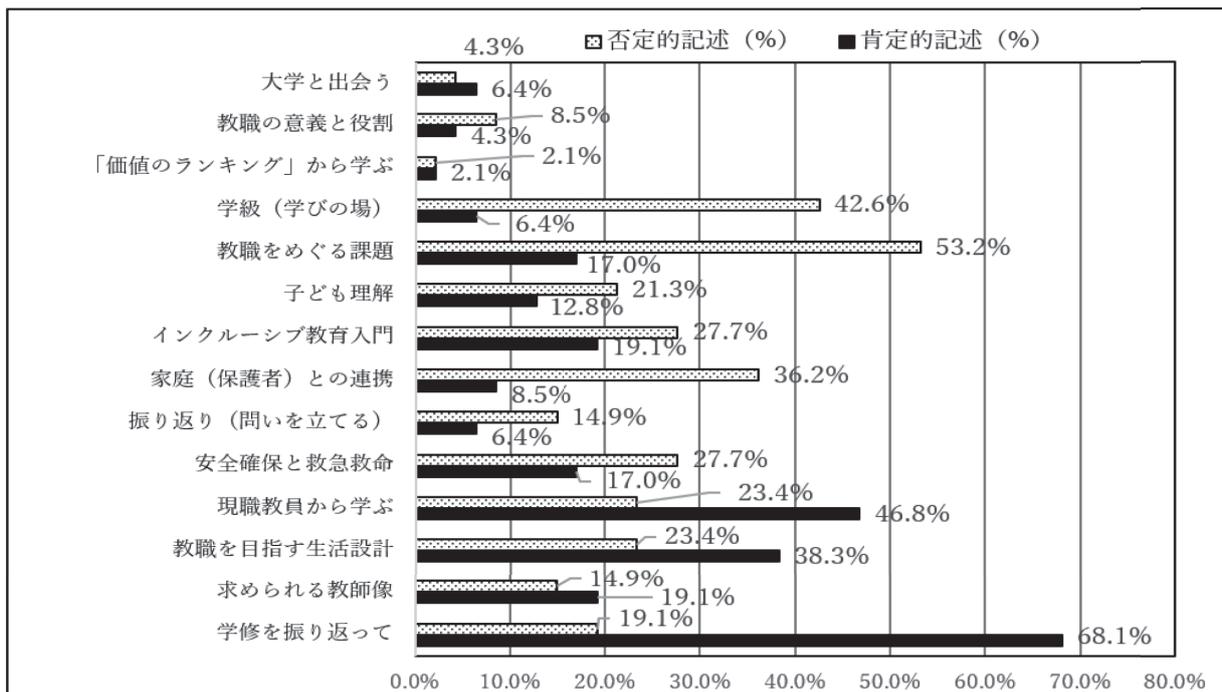
今年度入学の1年は授業開始時では教職に対する意欲が高く、表2-1の通り、47人中39人の学生が教員になりたい気持ち強い傾向にある6以上で回答して

いる。この傾向は、昨年度の1年の学生と大きな差はない(表2-2)。また、授業終了時における教員になりたい気持ち強い傾向を示す6以上の学生についても大きな変化がなく、この点についても昨年と同様の傾向である。

次に、図2-1と図2-2で8~10の教員になりたい気持ち強い生徒のグループを見ると10の層については昨年同様、減少している。これは、大学での学修が進み学校や教員の現実について理解が進んだことによる影響だと考えられる。しかしながら、8~10



【図1-1 各回における学生の授業の捉え方(割合)】R5



【図1-2 各回における学生の授業の捉え方(割合)】R4

までの合計を見るとは昨年度は授業終了時に減ってしまったが、今年度は増えることはなかったものの、授業開始時と同数となった。学生の不安感に配慮をしながら授業を進め、必要に応じて学生へのフィードバック

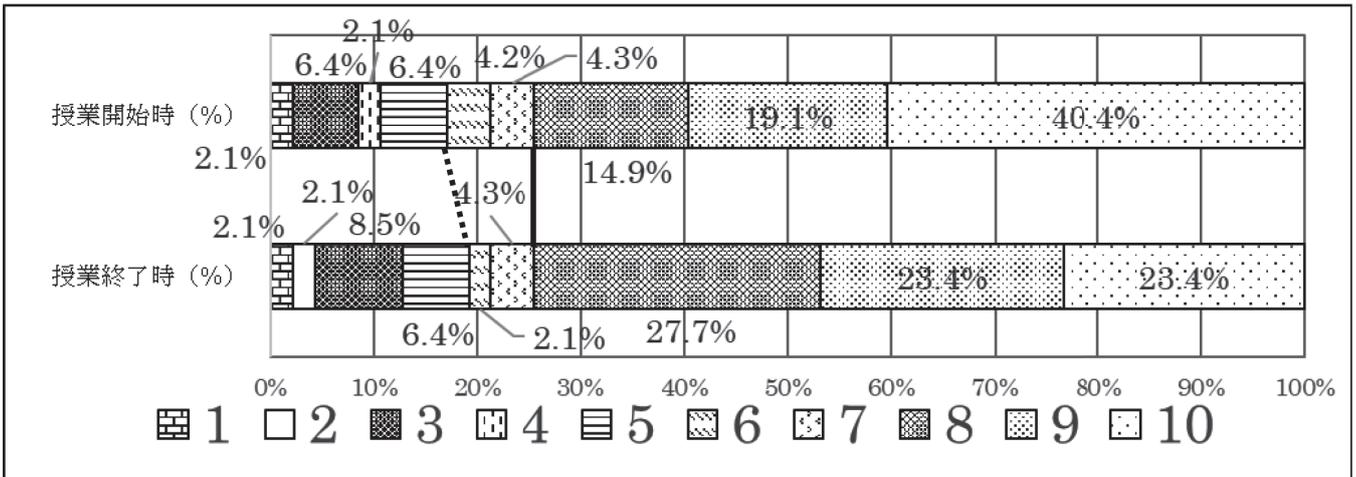
を OPP シートや授業を通じて行うことは、もともと教職に対する意識の高い学生には一定の効果があったと考えられる。

【表2-1 教員になりたい気持ちの変化】R5

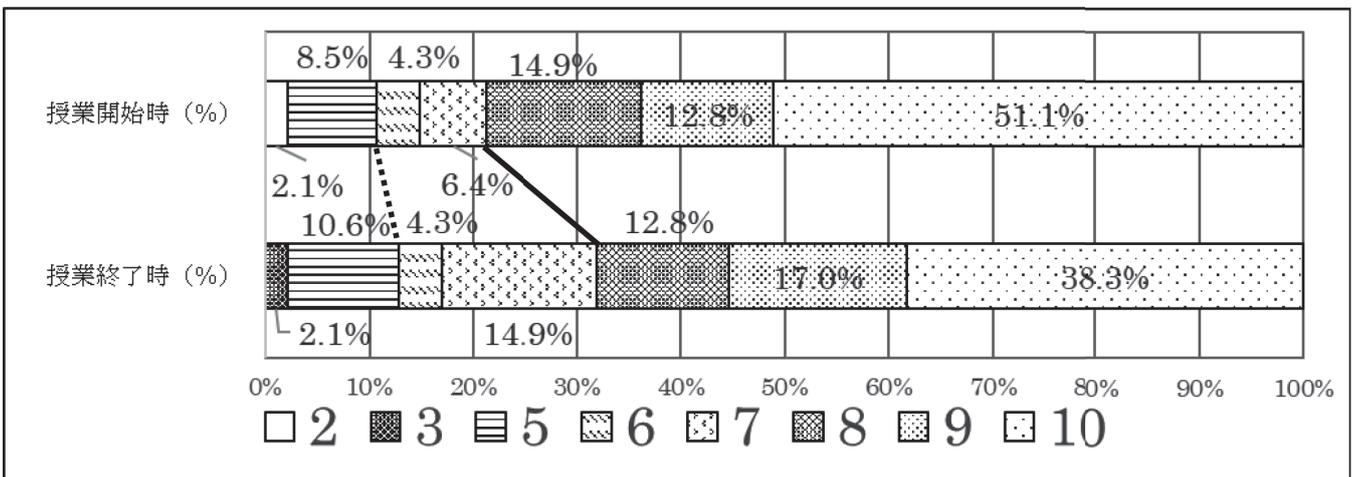
なりたい気持ち	授業開始時		授業終了時	
	人数	割合	人数	割合
0	0	0.0%	0	0.0%
1	1	2.1%	1	2.1%
2	0	0.0%	1	2.1%
3	3	6.4%	4	8.5%
4	1	2.1%	0	0.0%
5	3	6.4%	3	6.4%
6	2	4.2%	1	2.1%
7	2	4.3%	2	4.3%
8	7	14.9%	13	27.7%
9	9	19.1%	11	23.4%
10	19	40.4%	11	23.4%
合計	47	99.9%	47	100.0%
6～10合計	39	83.0%	38	80.9%

【表2-2 教員になりたい気持ちの変化】R4

なりたい気持ち	授業開始時		授業終了時	
	人数	割合	人数	割合
0	0	0.0%	0	0.0%
1	0	0.0%	0	0.0%
2	1	2.1%	0	0.0%
3	0	0.0%	1	2.1%
4	0	0.0%	0	0.0%
5	4	8.5%	5	10.6%
6	2	4.3%	2	4.3%
7	3	6.4%	7	14.9%
8	7	14.9%	6	12.8%
9	6	12.8%	8	17.0%
10	24	51.1%	18	38.3%
合計	47	100.1%	47	100.0%
6～10合計	42	89.4%	41	87.2%



【図2-1 教員になりたい気持ちの変化(割合)】R5



【図2-2 教員になりたい気持ちの変化(割合)】R4

3-4 授業開始時と終了時の教職に対する学生の意識の変容について

次に、開始時と終了後のなりたい気持ちに関する理由について分析して学生の教職への志向や学修への意欲がどのように変容していったかについて見ていく(表3-1)。これは学生に「教師になりたい気持ち」について「とてもなりたい」を10、「全くなりたくない」を0とし、10から0の11段階で回答してもらったものを、さらに「そのように回答した理由」について記述してもらい、その内容を分析したものである。教員の志望動機が「自分なりの明確な理由」がある、「進路選択に対する迷い・慎重さ」が窺える、「漠然とした夢・憧れ・なることが目標」、「教職に対して否定的な捉え」をしている、「もともと教員以外の志望」をしている、の5つに分類し、終了時にどのように学生の意識が変容していったかについて人数とそれぞれのカテゴリーの中での割合を示したものである。意識の変容については「前向きに捉えるようになった」、「他の進路選択も考えながら」の平行志向、「適正や将来などの不安」を感じるようになった、「変化なし」、「その他」の5分類に整理し、昨年度の調査結果と比較を行った。

授業開始時で「自分なりの明確な理由」があった学生については、「前向きに捉えるようになった」学生の割合が昨年と比べて少ない。これは、入学後に授業や大学生活などを通して視野が広がり、他の職業についても興味をもち始めた学生が一定数いたためと考えられる。例えば、授業開始時に「勉強が嫌いな生徒をゼロにしたいから。生徒が人間的に成長していく手伝いをしたいから」と答えていた学生が、授業終了時には「卒業後は教員一本で考えているが、他の道に進む可能性もゼロではない」と考え方を少し変えている。

一方、「進路選択に対する迷い・慎重さ」が窺えた学生や「漠然とした夢・憧れ・なることが目標」としていた学生については昨年度と比較し違いが見られる。まず、「進路選択に対する迷い・慎重さ」が窺えた学生については、「前向きに捉えるようになった」学生が、昨年度は16.7%だったのに対して今年度は50.0%に、「適正や将来などの不安」が、25.0%に対して6.3%になっている。また、「漠然とした夢・憧れ・なることが目標」としていた学生についても「適性や将来などの不安」が、昨年度が20.0%だったのに対して9.1%に、「前向きに捉えるようになった」と気持ちに「変化なし」としているものの、なりたい気持ちが8以上の意欲が高い学生を合わせると、65.0%から81.9%となっている。なお、なりたい気持ちが8以上の学生だけで比較した場合でも、「漠然とした夢・憧れ・なることが目標」は全体と同数ではあるが、「進路選択に対する迷い・慎重さ」は全体の傾向とほぼ同様の傾向が見られる(表3-2)。

3-5 授業開始時と終了時の学生の疑問や不安の変容について

次に学生の疑問や不安が授業改善によってどのように変容したかについて分析する。この項目は教員になりたい(なりたくない気持ち)の影響を排除するため、なりたい気持ちを11段階で回答した理由とは別の項目に質問を設定し、「教職に対してあなたが今、疑問に思っていることや不安に感じていることがあれば教えてください」と聞いた。表4-1は授業終了時の学生の疑問・不安の状況について大まかに示したものである。疑問や不安が解消できた学生とそもそも疑問や不安を抱いていない学生の数は昨年と比較して今年度はやや少ない。また、疑問・不安をもっていなかったが学修を通

【表3-1 授業終了時の学生の意識の変化】

授業開始時の教員になりたい気持ち 10～0を選んだ理由	R5			授業終了時の気持ちの変化 (授業開始時との比較)	R5		R4	
自分なりの明確な理由	16	10	→	前向きに捉えるようになった	10	62.5%	8	80.0%
				他の進路選択も考えながら	4	25.0%	2	20.0%
				適性や将来などの不安	2	12.5%	0	0.0%
進路選択に対する迷い・慎重さ	16	12	→	前向きに捉えるようになった	8	50.0%	2	16.7%
				変化なし	7	43.8%	6	50.0%
				適性や将来などの不安	1	6.3%	3	25.0%
				その他	0	0.0%	1	8.3%
漠然とした夢・憧れ・なることが目標	11	20	→	前向きに捉えるようになった	5	45.5%	11	55.0%
				他の進路選択も考えながら	1	9.1%	3	15.0%
				適性や将来などの不安	1	9.1%	4	20.0%
				変化なし(なりたい気持ち8以上)	4	36.4%	2	10.0%
教職に対する否定的な捉え	1	3	→	前向きに捉えるようになった	0	0.0%	1	33.3%
				他の進路選択も考えながら	0	0.0%	2	66.7%
				その他	1	100.0%	0	0.0%
もともと教員以外の志望等	3	2	→	前向きに捉えるようになった	0	0.0%	1	100.0%
				他の進路選択も考えながら	3	100.0%	1	100.0%

【表3-2 授業終了時の学生の意識の変化（開始時の教員になりたい気持ちが8以上の学生）】

授業開始時の教員になりたい気持ち 10～0を選んだ理由	R5			授業終了時の気持ちの変化	R5		R4	
	人数	割合			人数	割合		
自分なりの明確な理由	16	10	→	前向きにとらえるようになった	10	62.5%	8	80.0%
				他の進路選択も考えながら	4	25.0%	2	20.0%
				適正や将来などの不安	2	12.5%	0	0.0%
進路選択に対する迷い・慎重さ	8	7	→	前向きにとらえるようになった	4	50.0%	2	28.6%
				変化なし	4	50.0%	2	28.6%
				適性や将来などの不安	0	0.0%	2	28.6%
				その他	0	0.0%	1	14.3%
漠然とした夢・憧れ・なることが目標	11	20	→	前向きにとらえるようになった	5	45.5%	11	55.0%
				他の進路選択も考えながら	1	9.1%	3	15.0%
				適正や将来などの不安	1	9.1%	4	20.0%
				変化なし（なりたい気持ち8以上）	4	36.4%	2	10.0%

して疑問・不安を感じるようになった学生と疑問・不安の内容が変化した学生については両者を合わせると大差はない。疑問・不安をもっている学生はある意味、課題意識をもった学生とも考えられ、新たな疑問・不安が生じるということは必ずしも悪いことではない。大切なことは、学生が課題と捉えているか重荷と捉えているかを指導の中で見極めることであろう。また、開始時と同じ疑問・不安を持ったままの学生4名については労働時間などの教員の働き方に関するものであり、実際に教員を経験していないこともあり、授業において解消することは困難な項目であった。

さらに、新たに疑問・不安をもった学生と疑問・不安の内容が変化した学生について分析したものが表4-2である。まず、「能力・適性に関するもの」は昨年度40.0%であったのに対して今年度は21.7%になっているが、これは昨年度の分析で、教員は完璧でなければならない、失敗は許されないと思い込んでいる学生が相当数いたことを受けて、「大学を卒業し教員免許を取得して採用試験に受かれば誰でも教員にはなれる。しかしながら、教師になることは難しい。皆さんに目指してほしいのは、教員になることではなく、教師になることだと思っている。そのためには適性よりも今は、自分にとっての理想の教師像とは何かについてまず真剣に向き合ってほしい」というメッセージをことあるたびごとに発信していったことも多少は影響があったものと思われる。逆に、「働き方に関わるもの」(20.0%→30.4%)「児童生徒への指導」(20.0%→47.8%)については昨年と比べると多いが、この2項目は、3-2で述べたOPPシート分析の中でも触れたように、比較的「否定的記述」が多かった項目とも一致している（「教職をめぐる課題」25.5%、「子ども理解」21.3%）。これらは、実際に学校現場を経験して少しずつ見えてくるもの、そして、教員になってから学びながら改善するものであるため、座学ではなかなか解決できないものでもある。

【表4-1 授業終了時の教職への疑問・不安の状況】

教職に関する疑問や不安	R5		R4	
	人数	割合	人数	割合
解消	6	12.8%	8	17.0%
授業開始時も終了時もなし	11	23.4%	14	29.8%
疑問・不安なし→あり	7	14.9%	10	21.3%
疑問や不安の内容の変化	15	31.9%	10	21.3%
開始時と同じ疑問・不安	4	8.5%	2	4.3%
その他	4	8.5%	3	6.4%
合計	47	100.0%	47	100.0%

【表4-2 疑問・学修後に生じたと思われる疑問・不安の変化等】 ※R5は複数回答した学生1名あり

学修後に生じた疑問・不安	R5		R4	
	件数	割合	件数	割合
能力・適性に関するもの	5	21.7%	8	40.0%
働き方に関わるもの	7	30.4%	4	20.0%
教育実習	0	0.0%	1	5.0%
児童生徒への指導	11	47.8%	4	20.0%
保護者対応	0	0.0%	2	10.0%
その他	0	0.0%	1	5.0%
合計	23	100.0%	20	100.0%

4. まとめ

今回の調査研究では、カリキュラム改善をして学生の不安感に配慮をしながら授業を進めるとともに必要に応じて学生へのフィードバックをOPPシートや授業を通じて行うことがもともと意欲の高い学生には教職へのモチベーションを維持するのに一定の効果はあったことがわかった。また、教員になることに対して迷い・慎重さを示す学生や教員として何をしたいのかが明確でなく単になることが目標である学生にとっては教職に関する能力・適性に対する不安の払拭や教職に対する意識の向上には一定の効果があることが明らかになった。一方で「児童生徒への指導」や「働き方に関わるもの」など、実際に教員になってから直面する課題の解決に

については大学の授業だけでは限界があると言える。以上を踏まえ、今後の学生への指導や支援の在り方について述べる。

4-1 授業等での学生への基本的な関わり方

これまで述べてきたように、教員になることへの不安が学生の教職への志向に影響を与えることがわかった。教職の厳しい現実について伝えていく必要は当然あるが、教員が発したメッセージの影響について絶えず気に留めながら、必要なフォローをしていく努力が必要であろう。この点については学修履歴が残るOPPシートの活用は非常に有効で、疑問・不安が学生の課題意識の表れか重荷となっているかを見極め、継続性をもって指導していくことをある程度可能にしている。

また、実践センターでは教職入門Ⅰのアンケート調査を毎年行っているため、その情報について各講座・分野の担当教員に伝えていく必要がある。特に意欲が下がっている学生についてはアンケートの調査結果やOPPシートに記述されている内容についてきめ細かに情報交換をし、引き継いでいくことで今後の指導に活用していただくことが教職に対する意識を高めていくことにつながると考える。

4-2 教職に関する体験的学びの拡充と附属学校園の関わりについて

今回の調査から、大学における授業だけでは学生が教職について自分事として捉えることができず、学生のもつ課題に対応できないことが明らかになった。このことから、学校をこれまでの「児童生徒」という立場ではなく、学修を通して教職について理解し始めた「学生」という立場から改めて見つめ直す機会を設けることが急務である。実践センターではこの2年間さいたま市の小中学校の協力を得て希望者を対象に9月に学校参観を行っているが、学生は多くのことを学んでいる。今後は体験を通したより深い理解を目指す取組をカリキュラムに位置づけ全員を対象に実施していくことが望ましいと考えられる。

また、附属学校園が教職支援の機能を発揮することも重要である。例えば、保護者対応ではゲストティーチャーとしてPTA役員を招き、PTA活動の重要性について学生に語ってもらいPTAに対する誤解を解き、連携の重要性について理解を深めていく取組も今後考えられる。さらに、今年度附属中では教育実習終了後に感じたことを生徒に書かせた学年がある。附属小中学校の児童生徒は、様々なことを言語化する学習を当たり前に行っているため、実習生から子どもたちが学んだことを的確に表現してくれる。子どもが実習生から学んだことを実習後に学生に紹介する場を設けることも教職への意欲を高めることとなる。児童生徒が実習生から何を学び、何を学ばなかったかについては意外に学生にフィードバックされていない。このことは附属学校園だからこそできる取組である。児童生徒の言

葉を学生に伝えることが教員の魅力を知るきっかけになろう。最後に附属中学校の生徒の実習の感想で本稿を閉じたい。

『僕は、教育実習を終えてたくさんのことに気づき、学ぶことができました。中でも、学びへの意識、お互いが情熱をぶつけることの大切さという二つの点に気づき、学ぶことができました。学びへの意識という点では教育実習生が授業に取り組む態度をみて、自分たちももっと意欲的に授業に取り組まないといけないと感じさせられました。また、お互いが情熱をぶつける大切さという点では授業をしてくれる先生と生徒が互いの一生懸命さをぶつけることで普通の授業よりもより一層、質の高い授業ができたのかなと思います。この二つの大切さに気づき学べた今だからこそこれからの生活に活かしていかなければならないと思えた良い教育実習でした。』

【参考文献・引用等】

- (1) 令和4年度公立学校教員採用選考試験の実施状況(令和4年9月9日、文部科学省)。
- (2) 「教師不足」に関する実態調査(令和4年4月文部科学省)
- (3) 「教師不足」への対応について(「アンケート結果の共有と留意点」(令和5年6月20日付け5教教人第13号、文部科学省)
- (4) 大澤他(2020)「今後の教育学部における教職支援の在り方」『埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要』18,1-8.、櫻井他(2021)「今後の教育学部における教職支援の在り方Ⅱ」『埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要』19,1-8.、石田他(2022)「今後の教育学部における教職支援の在り方Ⅲ」『埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要』20,1-8.
- (5) 関口(2023)「教育学部1年前期における学修に関する一考察」『埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要』21,65-72.)
- (6) 堀 哲夫(2019)「新訂一枚ポートフォリオ評価OPPA 一枚の用紙の可能性」東洋館出版社
- (7) 本調査の実施期日は、授業開始時の調査は2023年4月18日に、授業終了時の調査は、2023年7月25日である。「教師になりたい気持ちとその理由」「今疑問に思っていることや不安を感じていること」については両日に調査し、「授業を履修してどのように変化があったか」は授業終了時にのみ実施された。
- (8) 関口(2023)「教育学部1年前期における学修に関する一考察」(再掲)
- (9) 同上